

# 家族に「無限の苦しみ」

## 失踪者問題の現場

ある日突然、家族や知人の誰かがこつぜん姿を消す「失踪(しっそう)」。全国で年間約8万人が行方不明になるといわれる。昨年、県警に寄せられた家出人捜索願は975件に達し、うち約2割は依然不明のまま。

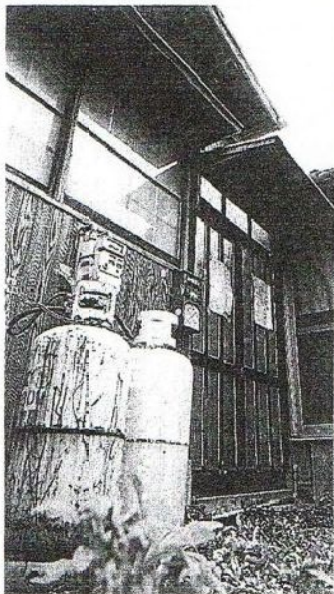
(報道部・内海宏一)



「主」を失った自宅の玄関には張り紙があった。「ご帰宅の際は至急お電話下さい」。風雨にさらされて薄れた文字が年月の経過を物語る。長崎市江里町で独り暮らしだった武田久子さん。当時84歳が行方不明になったのは2007年8月24日。

理由さまざま  
昨日、県警が受理した「家庭関係」「仕事」「病

自宅前で掃除している姿を近くの住民が見かけたのが最後だった。当時



自宅のある武田さんの家は、今も長崎市江里町で行方不明になった武田さんの姿を捜すため張り紙が貼られている。

「自分でも限界がある。理由はさまざま。失踪者家族を支援するNPO法人「日本行方不明者捜索・地域安全支援協会」(MPS)によると、仕事などでストレスを抱えた30、40代の男性の失踪が増えているのが近年の特徴。1996年0年代の失踪は成人と未成年がほぼ同数だったが、08年は成人が未成年の3倍に達した。

夢に出てくる

失踪者家族の心情も複雑で、02年3月、東京から福岡に向かう旅客船にかばんを残したまま消息不明になった東京都荒川区の宮本直樹さん(当時24)の父、正栄さん(68)は「行方不明になって1年間は眠れなかった。助けを求める息子が夢に出てくる」と話す。そんななか、毎日日々を過ごす家族たち。「私たち両親が一日でも長く生きてほしい。毎日電話を待っている」と正栄さんは言葉を繰り返す。別の失踪者家族は「死んだことが分ればあきらめがつくかもしれない。無量の苦しみだ」

MPSによると、長引く捜索などで失踪者の家

## 県内で捜索願975件 2割は依然行方不明

族が心身ともに追い詰められ、体調を崩すことも多い。「捜索を手伝う」「行方を知っている」といって、お金を要求され詐欺被害に遭った事例報告もある。

祈る思い胸に

記事の冒頭で触れた武田さんのめい、植田美弥子さん(33)は失踪後1年間、行方を捜し回った。武田さんは「母親代わり」でもあり、今でも毎週、武田さん宅を訪れ、「どこかベンチに座っていないか、気付けば姿を捜している」。

武田さんの自宅の家賃は植田さんが支払いを続けている。「(武田さんが)最初に帰ってくるのはこの家だから。そんな思いが植田さんの胸にはあり、祈るような思いで情報提供を呼び掛けている。連絡先は植田さん(電06560・005・4171)。MPSのホームページアドレスはwww.mps.or.jp)。

## 「目弁連指針は競争阻害」

### 部内の公取委に申し立てへ

債務整理を望む依頼者と目弁連の直接面談を求めた目弁連の指針は、弁護士間の自由競争を阻害し独禁法違反に当たるとして、東京部内の

### 債務整理業務の規制

申し立ては、自由競争を求める弁護士と、トラブル多発を懸念して一定の制限を設けた目弁連の立場の違いが顕在化した形だ。申し立てることを明らかにしたのは、債務整理件数が国内最大規模の「法律事務所MIRAI O」(旧法律事務所ホームロイヤール代表の西田研志弁護士。同事務所は、債務整理を

中心に扱う事務所として先駆的な存在で、過去8年間19万件余りの相談を受け、西田弁護士は1999年、当時禁止されていた弁護士広告をめぐり公取委に申し立て、翌年に目弁連は

目弁連は昨年7月、債務整理の依頼者とは原則として直接面談し、意向を尊重するよう弁護士に求める指針を策定した。西田弁護士は指針を「電話やメールによる相談を排除するのは利用者のニーズの無視で、特に地方の人の相談場所を奪う」と批判。「指針に拘束力はないが、弁護士会は強制加入団体で懲戒権もあり、事実上業務を束縛し、自由競争の機会を奪っている」として

## 「春の嵐」列島直撃



し、1918年に観測した従来の記録を92年ぶりに更新。同市を含む全国7道県の26地点で、最大風速が観測史上最大を記録した。神奈川県では午前4時ごろ、民家の屋根を補修していた相模原市の男性(59)が転落して胸の骨を折るなど2人が重傷を負ったほか、2人が軽いけが。旭川市の